とする様に家族の外部的な諸問題をとり上げているのであるが、たゞこゝで扱う家族が農村家族である限り原則的には農場と関係のあるものである。そこで家族の機能や形態も農場との関連に於いて考察する必要はなかろうか。勿論各部で断片的に触れているが、然し全般的な問題として農場を中心とする問題がとりあげられているのではないかと思う。第二部は前述の様に地域集団の問題であるが、従来ともすれば社会学的方法として空間的な考察があまりなされていなかつたのに対し、地域集団の項目の下にかなりの頁数をさいているのは地理学徒として最も親しみを覚えるのである。こうした傾向は特に本書に於いてのみ顕著であるというのではなく、米国農村社会学の最近の著作は一般にこの傾向が強い。然し特に本書に於いてこの点を挙げたのは第六章にもある様に、「人間は多かれ少かれ特殊な地理的地域に制限されない様な社会組織とか協同の型態を維持する事は出来ない」とし、又「人間は動くためのエネルギーを働かさねばならない限り地方集団は重要な意義を有する」としてその集団内の関係が地域化される事を述べている点であり、こゝに生態学的方法の一端を知る事が出来ると思うのである。こゝに敢えて二三筆を加えたのであるが勿論すぐれた観察と叙述に対して小生如き批判の余地もないし、又社会人類学的、生態学的な方法で農村社会学に新たな刺戟を加えんとする本旨に満腔の敬意を表したい。尚巻末に価値指向に関する論文が附録として加えられている事を附記しておく。—木地節郎—

Karl Marx und die deutsche Revolution von 1848

von H, Meyer.

Historische Zeitschrift Bd. 172 *Heft* 3.

ドイツ三月革命はいわゆる流産した市民革命といわれ、またドイツ統一問題との関聯においては、市民的な国民国家を市民階級自身では完成し得なかつたこと、而てその課題はプロイセンの地主貴族の掌中に委ねられる結果になつたドイツ史の一齣として見られて来た。即ちこの革命は市民的自由主義のドイツに於ける政治的活動の終曲であるとともに、プロイセン的帝国統一の序曲として考えられるのが普通である。十九世紀ドイツ史を七一年の事業に焦点を置いて眺める場合には、市民革命をも国民国家形成の一過程として位置づけることが妥当なことであるのはいうまでもない。従つて市民革命の歴史的意味に対するドイツ史学の波及は、自由主義—世界市民主義を観念的国家論、倫理観に関聯せしめることに重点をおかれる結果となつてしまつた。それ故四八年の市民革命に於いては、既にパリの二月革命と同様に、労働者が革命の線列に参加し、プロレタリアートの革命的勢力によつて影響されるところにアクセントを置くとこは正統史学の中においては継子扱いを受けて来た。それはドイツに於いてもまた極めて顕著な歴史学界の傾向であつたのであり、その影響を最も強く受けた我国の史学にもあてはまることである。従つて三月革命に於ける社会主義の実際的政治活動も、つい最近に至るまでは殆んど省られなかつたと言つても過言ではない。此所に紹介する論文の筆者マイヤーが「社会主義の理論家としてのマルクスに就いては、極めて精細な研究がつまれてきたのに反し政治的実践家としての彼

が不当に継母扱いを受けて来た」これまでのドイツ正統史学の傾向を特に指摘して、前文を附けているのも、上述のような意識から出たものでろう。

以下筆者の叙述に従つて内容を紹介するが、予め断つておきたいことは、ドイツ史学の社会主義に対する研究が、今日まで甚だ貧弱であつたという事実が、此の論文にも現れて居ることである。マルクス・エンゲルスの全集や選集が、周到な注意を払われて幾通りも邦語に訳され、多くの解説論文も出ている現在に於いて、我国に於いても此のような極めて初歩的な論文は、外国語に頼らなくても大体纒められるように思う。たゞ三月革命当時の珍らしい出版物が註に挙げられている点は、史料の参考になり、他日其等もまた我学界に於いて利用出来るようになることを希むものである。

三月革命は、啓蒙的理念においては革命の急進的な個人や団体に共通したものであつたが、その運動はそれぞれの地域差によつて制約があり、影響するところは様々である。マルクスは最初から、総てのドイツ社会主義的革命的グループに統一を与え、それを市民的世界に強力に対立するまで進めようと努めたのであつた。彼は地域的に限定された革命的急進主義者、即ち労働者と小手工業者とを「プロレタリア」なる名の下に統一し、その支援のもとに革命を社会主義にまで導こうとしたのであり、彼の活動はいわば普遍的立場に立つたことに特徴がある。ボルン Stephan Born の活動は、地域的特殊性に拘束されて生じた一類とマルクスの普遍主義との中間に位するものであつた。そうしたマルクスの原則的な態度は、革命の経過中大体に於いて忠実に守られた。この原則は既に革命直前のパリに於ける共産主者同盟において確立していた。ドイツに二月革命が波及するに至つて、マルクスは、当時ドイツでは最も近代化の進んでいたラインランドに赴き政治活動を開始するのであるが、それは「偽装せられた革命的組織」とパンフレットや新聞による過激な宣伝とを併用した。筆者マイヤーは此所で「ドイツにおける共産党の要求」が、たとえ国民革命的なイデオロギーの仮面を被つていても、本質的にブルジョアジーに対する挑戦を意図したろものであつたことを力説するが、それは至極当然のことである。問題はマルクスが「ドイツ共産党」なる一つの政党乃至革命的団体を実際に形成せず「最も極端な民主主義」として現れるに止まつたことであり、従つて社会主義革命が市民革命と如何なる点までは並行し、何処で分裂するかといふことを、当時マルクスはどんな具合に考えて居たかという点にまで考察が進められなければなるまい。

四八年四月一〇日以後、マルクスはケルンに留まつて新ライン新聞の編輯に従事したが、それは独り宣伝のみではなく、同時にドイツ労働者組織の拡大を目的としたものであつたことも今更特筆することではあるまい。

ボルンのベルリンに於ける活動はこれと少し趣を異にしていた。彼の「労働者友愛会」Arbeiterverbrüderung はマイヤーによれば「身分上の限界を犠牲にした」大衆運動の道を歩んだ。従つてボルンには「市民階級との同盟が彼（ボルン）の社会主義的希望を充足する可能性を持つている」と信じられたのであり、「ボルンとマルクスとの政策の相違は

あらゆる場合に明瞭であつた」と筆者は述べている。ボルンにとつては革命の統一的前進が重要であり、その担い手の諸契機は背後に退いていた。それに対しマルクスにとつては「ブルジョア革命」と「プロレタリア革命」の分離を判然と意識することが重要であつたというのである。此の両者の対比に関して、我々は林健太郎氏のマルクス、ボルン批判と喰違いのあることを認めなければならない（同氏著三月革命と社会主義、西洋史学第十一輯参照）。しかも前に指摘したように、マイヤーの両者に対する解釈の仕方が余り固定的、形式的であり過ぎることを認めざるを得ぬのである。

更にマルクスは中央集権的統一的な共和制を要求し、革命がドイツの対外政策と密接に関聯するものであること、革命の完成の為には「反動の避難所」ロシアとの分離が重要であり、被抑圧民族たるポーランド人、アイルランド人等の解放が行われなければならぬことを発表して、フランクフルト国民議会の左派を勇気づけようと努力した事実が述べられている。之等はマクマスの社会主義が、最初から全ヨーロッパ的普遍的な視野の下に熟考され、展開されたことを証明するものであろうが、それとても、今日我々は新ライン新聞によつて容易に接し得ることであり、またマイヤーのいうような普遍主義も空想的社会主義との対比に於いてはじめて明確に浮彫にされるのであつて、此論文の内容だけではその効果を充分上げるのに成功してはいないと思う。

九月ラインランドにおいて、労働者が民主主義協会をはじめ反動化するブルジョアージ、支配階級に反抗した時、マルクスの活動は頂点に達したが、その社会主義革命は失敗し、新ライン新聞も一時発行を禁ぜられ、彼の有力な協働者は此の地を去るの已むなきに至つた。その後ケルンの労働組合はマルクスの指導下に入るが、彼の活動は次にはマルメウの休戦に反対し、反革命に転化する情勢の中でプロイセン君主制とブルジョア内閣、プロイセン皇太子内閣に増々激しく反抗の鋒鋒を尖鋭にして行く。十月に長い間待望せられていたウィーンの蜂起を機として、全ドイツ的急進主義者の革命がマルクスによつて考えられたが結局反革命勢力の為に失敗し、翌年五月には新ライン新聞は禁止断圧されてしまつた。マルクスはプロシア国民議会の選挙に参加して自己のイデオロギーに最も近い候補者を支持しようと努め労働者をも指導するが、その効果は少かつた。かくて最後に彼が三月革命を通じて得た結論は、「力に対する力」によつて即ち暴力革命によらなければ社会主義革命は成功せず、また社会主義革命が成功するまでは如何なる革命も失敗に終るというのであつた。此の間の事情は、彼の「賃労働と資本」に示されているところによつて我々にも容易に知られるのである。かくてマルクスの三月革命に於ける政治活動は、四九年五月の暴力革命の計画挫折をもつて終るのである。

以上本論文は、マルクスの四八——四九年の経過中に於ける活動を時間を追つて述べたものであるが、紙幅の少い為か新ライン新聞を中心にしたマルクスの活動の梗概に終つている。彼の目標は、ブルジョアジー以上の凡ゆる階級に対する労働者階級の闘争を中心にし、全ヨーロッパ的普遍的な社会主義運動

を展開することであつたというのが本論文の中核的な主張であり、その説明以上の何ものでもない。かくて三月革命に於けるマルクスの位置づけが我々にとつては再確認されただけであり、新しいマルクス解釈も、三月革命の意義も本論文から見出されなかつたというてもよい。ドイツ正統史学の社会主義研究の立遅れが如何に甚しいものであつたかということが、伝統古い此の雑誌に此の程度の論文が今日でも掲載され得るということによつて覗えよう。然し逆にドイツ史学界にして見れば、かゝるマルクスや社会主義に関する論文が此の雑誌にはじめて上梓されただけでも、非常な進歩を示すものであると見られるかもしれない。

—岡部健彦—

一九五二年度史学科卒業生及び卒業論文題目

〔国　史〕

武家政権成立に関する一考察　荒井清明
畿内の一向一揆に関する一考察　石田善人
渡辺華山について　大月明
一四世紀日本の帝政　佐藤利夫
幕末貿易史の研究　杉井六郎
日清戦争について　平田治
加藤弘之の思想に関する一考察　平林一
近世捕鯨業についての一考察　古谷俊夫
中世武士団に関する一考察　宮城駿

〔東洋史〕

一七世紀におけるキリスト教宣教師のトンキン伝道　小玉新次郎
金代平陽府の文化の基盤としての経済　苫名厚
中国における近代美の萌芽　西瀬英美

〔西洋史〕

英国における絶対主義王政と枢密院議会　井上隆夫
南北戦争前における Lowell 木綿工業の性格　茨木慶三
英国中世都市の起源について　小川与四郎
ロシア中世史の一形態　大西晏
アレクシス・トックビル「旧制度と革命」論　岡田章
一八世紀における英国議会改革運動　岡本行雄
独逸初期資本主義の一形態　誉田四郎
イギリスと南アフリカ　坂井守
ドイツ中世都市の成立　鯖田豊之
Bettelorden の成立とその歴史的意義　富岡次郎
サヴォナローラ研究　永井三明
デモステネスとヒュポクリシス　永井康視
デモステネスの「平和論」　西沢龍生
ロシア国民議会の研究　野口治郎
ロバート・オーウェンとその労働運動における限界　美濃部嘉一
五世紀のヘラクレス　三浦春奈
Moriae Encomium の研究　吉住治

〔地　理〕

滋賀県茶業の地理学的研究　浮田典良
日本水産業の一性格　柿本典昭
大隅半島における商品生産地域の展開　勝目忍
工業上よりみたる加古川中流々域の特殊性　末尾至行
広島県の海外移民に関する二三の問題　由比浜省吾